読み比べ

羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語　―　現代語訳　―

今は昔、摂津国（大阪府北西部と兵庫県南東部）あたりから、盗みをしようと京へ上ってきた男が、日がまだ暮れないので、羅城門の下に隠れて立っていたところ、朱雀大路の方は人通りが多いので、人が静まるまでと思って、門の下に立って待っていたが、山城（京都府南部）の方から大勢の人が近づいてくる音がしたので、彼らに見られまいと思って、門の二階にそっとよじ登ったところ、（そこを）見ると、灯りが小さくともしてある。盗人は、「不審だ。」と思い、連子窓から覗いてみると、若い女が死んで横たわっている。その枕元に灯りをともして、ひどく年老いた白髪の老婆が、死体の枕元に座り込んで、死体の髪を乱暴に抜き取っているのであった。盗人はこれを見ると、どうにも合点がいかず、「これは、もしや鬼ではないか。」と恐ろしくなったが、「もしかしたらただの死人の生き返ったものかもしれない。一つ脅かして試してみよう。」と思って、そっと戸を開けて、刀を抜き、「お前は、お前は」と言って走り寄ると、老婆はあわてふためいて、手をすりあわせてうろたえるので、盗人が、「これはどんな老婆が、こんなことをしているのだ。」と尋ねると、老婆は、「私の主人であられました方がお亡くなりになったのを、お弔いをしてくれる人もおりませんので、こうしてここにお置き申し上げているのでございます。その御髪が丈に余るほど長いものですから、それを抜き取って鬘（かつら）にしようと抜いております。どうぞお助け下さい。」と言うと、盗人は、死人の着ている着物と老婆の着ている衣をはぎ取り、抜き取ってある髪の毛をまでも奪い取って、駆け下り逃げていった。ところでその門の二階には死人の骸骨がたくさん転がっていた。葬式などに出せない死人をこの門の上に棄てておいたのである。このことは、その盗人が人に語ったのを聞き継いで、このように語り伝えているとのことである。